



冬を迎える

倉橋 惣三

冬が来る。幼稚園に冬が来る。寒くて困るとばかり思つては冬を迎える心といえない。季節々々に、幼児のための用心警戒は、心を用いなくてはならないが、たゞ、それだけでは折角の一年の四分の一を、恐れて過ごし、誼つて暮すことになつたりする。味ないことである。惜しいことである。子供には一年三百六十五日、みな好日でなければならぬ。みな楽しい日でなければならぬ。それを充分好日たらしめ、楽しい日であらしめない先生は、心なきぼつぎ、ようかんといわなければならぬ。

冬の初めから、子供に風をひかせぬように気をつけるのは寒冬を恐れるからよりも、好冬の幸福を失わせないためである。好春という語があれば、好冬という字もあつていゝ筈である。その好き冬の日を通じて、病床に寝て暮させないため

である。庭に出て元気に遊ぶ友達を、羨しそりに窓から見ただけで、保育室に閉ち籠められる不幸にあわせないためである。きょうも亦欠席して、楽しいお話のつゞきを聴き損じるといつたことにあわせないためである。冬の寒さもだんだんである。だしぬけに襲いかゝつては来ない。うつかりしている先生には、何んでも不意の突発であるうが、備えある先生の保育室では、そんなに突如として、全員がくさめの一齊連発ということがあるものではない。雨の日の朝の寒暖計を検べることを忘れ、子供たちの靴下のぬれていることに気がつかないうっかり先生に、貧血症の子の可愛らしいくさめが先づ、そつと、御注意申上げるのである。おや、窓があいているじやないのと、人ごとのようにおつしやいますけれども春から夏へ、夏から秋へはあけつばなしだつた、子供には背の

とどかない、北廊下の高窓であつたりする。

北の窓ばかりではない。一年中開ききりのベンチレーションだけではない。一枚二枚と、あけて自在の筈の硝子戸の硝子が一枚こわれたまゝ、——土用休み以来のまゝになつていたりする。いくら言つてやつても、硝子屋が来ないからではありましようが、そこへ一時的に修復（？）した半紙が、うす黄く破れて、外の風に、さびしく震えているに至つては風流の極致である。風流はいゝが、そのバイブレーションがあの子の弱い鼻粘膜に備わつてさつきのおさめ音階になつたのである。感冒幼稚園の名の起る所以である。硝子戸のたつつけの悪いすきまかぜに至つては、去年からのその幼稚園の、人力に及び難い運命なのかもしれない。

暖室法の科学、衛生学、経済学に至つては、それ／＼専門の研究があろう。こゝで考えるのは、その教育学である。教育学というのも、少々過熱のようだが、冬の暖室設備によつて、保育を暖める、好冬物語りである。

「爐辺」とか、「火鉢を囲みて」という言葉もある。その意味は、たゞに防寒だけのことではない。つどいあう、親しむ打ちとける、ゆつたりする。従つて、あたゝかは素より、なごやかといつた保育の大切な心を含んでいる。そうして、他の季節では得られない、冬の日の保育情趣を深うするものである。

わたしがニユーヨークの児童図書館の一室で、名のある童話家の話を子供達といつしよに聴いた時のことである。季は夏だつたが、その壁にある大きなマントルピース、（夏だから爐のところは、美しいついでがかくしてある）を指して『ねえ、こゝに火がパチ／＼燃えている冬でしたらねえ』とその派手なブラウスの若い話術家が、にこやかに言つたことを思ひだす。なにも『ワンス・アポン・エ・タイム』に限らない。『むかし／＼あるところ』にでも、爐辺は、話し手、聴き手の心を、あたゝかにし、なごやかにするものである。花の下もいゝが、気が散り易い。涼み台も話の本場だが、浮き過ぎたり沈み過ぎだつたりする。爐の前とか、火鉢のそばとかでは、話すにも聴くにも大切なコンセントレーションの心理が、おのづからの姿勢につれて起る。そのうえに互に燃える火を眺めているところに、そう緊張にもならず、散漫にもならない、互の心の中心が守られる。『皆さん』といつて、子供の顔を凝視したり、『それから』といつて、先生の顔が鬼だの神さまだのに見えて来たりしないところに、視覚性よりも感覚性の自由な想像の世界をつくらせ易い。そんなに話方のうまい先生でなくても（失礼）子供をうつとりさせることも、しんみりさせることも、おのづからできる。昔から、おぢいさん、おばあさんの孫への話術の自然の傑作も、多くは爐辺の産出であつたのである。

一寸理屈をいわせて貰いますが、幼児の話術——術という

べくんばの妙は、あんまり(一)かたくならず、力を入れすぎないところに秘訣があるともいえる。それも、ナマあくびをかみしめての内部散漫や、わきみをしたたり、襟をなおしたりの外部散漫では困るが、識らずに暖かさを感じていたり、手の無意識運動で火を直したりする。爐辺の淡泊さ、気軽さは、誠にあつらえむき、もつてこいの環境というべきものである。話者強いて語らず、聴者敢て聴かずといつた境地のステーチ的でなく家庭的なところに、お話は、それ自身芸術的に実在して来るともいえないのである。

理屈はこの位にして、火鉢の冬の家庭性の極地は——少くもその一つは、それを親子取りかこんで、かきもちを焼いている情景であろう。あれを冬の幼稚園の或日の午後によつてみられないものか。わたしは、幼稚園家庭化の一つとして、かきもち保育という、だしぬけに言つては、訳の分らない言葉を独りで用いている。事々しく説明するまでもないが、板床へゴザを敷いてその上に、大火鉢を置く、そのまわりを子供で囲む。先生もその中の適當のところに坐を占める。大盆にかきもちを盛る。火鉢のごとくの上には、かなあみをかける。子供達の顔が、かすかに火の色を反映して紅らむ。そこで、先生は長い竹箸で、かきもちを一枚々々かなあみの上に乗せる。以下お約束通り、かきもちがやける。かきもちが気長に、しかもまめに、注意深く裏返さねばならぬ。時にはこけるのがあるのも面白い。大きくふくらむのも愛嬌だ。先生

の膝のそばに醤油の皿がある。先生は、焼け加減を見計つては醤油につける。じゆつと微かな音がしてふんと、醤油の香がして来る。実に日本的な香である。子供らは、さつきから静かにかきもちのやける行程を観察していたが、この頃から、カタツを吞む、咽喉の音がした。先生はよく焼けたのから大皿に移す。子供らは、いよ／＼しんとして控える。幾枚か焼けたから、みんな揃つて、先生といつしよにいたゞくのをおとなしく、喜びの期待を以て待つてゐる。楽しい沈黙である。年の小さい子から、女の子の方から、順々に分かれたる。——コリ／＼、といふ音が聞える。子供達は、——先生も、——幼稚園にいて幼稚園に居ることを忘れてゐると時である。——たゞ一つ、注意が必要というよりも当然なことでは、その保育室に一ぱいの、こうばしい香が、隣りの室にも公然と漏れていくことである。従つて、このかきもち保育は、各組個々にはできない。この時は全園いつしよでないといふ場合が悪いが、それで、一齊劃一保育の弊に陥るといふ心配はあるまい。陥るのでなく自然に起るのは、各組打ちあわせ保育ということであろう。組の受持ちのない園長や先生も、どこか組かへ必ず割り込まして貰うこと。——かきもち保育の説明が大層長くなつたが、噛みしめて下されば甘過ぎない味のする筈である。

好冬保育は、爐辺や火鉢のまわりばかりではない。冬の間

にも暖い日もあれば、園庭にいゝ日和もあり、日だまりもある。一時間でも二時間でも、真に好冬の好機逸すべからずである。そのためには、予め、その日光タイムとその場所とを現地について研究しておくことは、心ある先生の好冬カリキュラムとなるであろう。それは午後と限らない。午前であるならば、他の仕事をそれに応じさえすればいゝ。午後日光がかけつてから、太陽の位置を勝手なところに呼び戻そうとしても、そんな我がまゝは清盛さんと雖も、できなかつたことである。

わたしは、西洋の幼稚園や保育所を見て廻つていた時、あの重厚な建築の中で、自然の日光を得るにむづかしくて、屋間から電燈を用いている処を見て心を寒うした記憶がある。日光光線の光りだけは人工的に補つても、温と紫外線効果とは得られる。どこかの園に多い北風吹き通しのバラック建て保育施設にも戦慄させられるが、冬に殊に恵まれる日光の温かさだけは、西洋の有名な幼稚園の幼友達にわけてやりたい位である。そうして、そこで、オシクラマンデユウの遊びを、その国々の言葉に翻譯して、すゝめてやりたいとも思う。

それにしても好冬保育などといつても、それを、元氣な子供の方のことのみにして、先生が、冬をきらつて居られては決して、いゝ好冬保育は実現されない。またしても、口が悪いが、多くの先生の中には、かきもち保育を専門のわたしの

ように、日なた、日だまりでも、なるべく外の寒さの気流、一風という程でもないのに――を避けたがるさむがりやがいなゝといふ限らない。それでは、冬の保育は、冬籠り幼稚園にかなり得ない。冬籠りといへば、何かわけがありそうでもあるが、幼児と共に冬を暮すものとしては、自分のおしよからに外ならないのである。外国の例ばかりひくようだが、わたしはシカゴ大学の幼稚園で、冬を暮したことがある。シカゴの冬は寒い上に、毎日雪だといつていゝ。その大学の幼稚園でわたしの感心したのは、その雪の中を、積つているだけで、なく降つている中でも、毎時間を区切つては、先生が子供を、必ず外へ出すまめまめしさであつた。但し、一寸だからといつて外套も着せずふるえながら一と廻り駆けさせるのではない。ちゃんと防寒の身仕度くをして、靴もちゃんと雪靴にかえさせて、庭へ出るのである。その出入りに少なからぬ時間もかゝるのであるが、先生方はそれを少しも面倒がらないし無駄とも思わない。子供達も少しも、おつくうがらない。わたしがつい手を出して、助けて、先生にとめられた位だ。冬の寒さに子供を鍛えるといつて、霜やけや、あかぎれを鍛錬征服とするような風習とは大に異つている。先生がおしよでは、好冬保育は決してできない。又、鍛錬とは明かに非科学的な不用意の冒険をさせることでは決してない。